

私の運動の原点 — はじめにかえて



私が民主的運動に入ったのは昭和一七年頃のことです。戦争の真最中でした。それから数えてみると五〇年の歳月がたっています。運動もいろいろとやりました。

農民組合、民商、政党、労働組合、生活協同組合、そして今労働者協同組合の仕事をしています。これらの運動のおもな舞台が、三重県松阪市とその周辺でした。もっとも、中央の委員長をしばしば勤めているので在京の期間も、半分近くを占めています。運動の中心になったのは部落の人たちでした。(生協の場合はや、趣きですが)

昭和二五年に私は失対事業に働くようになり、全日自労という労働組合をつくり、失業、貧乏、戦争に反対し、社会のなかにある不正、差別とたたかかってき

ました。その戦友の圧倒的部分は部落の人たちであり、これからお話しすることの多くは、その仲間たちと進めてきた運動のことです。

松阪市には大きな部落が三つ四つとありますが、そのなかの日野町、現在は京町というきれいな名前にかえられています。昭和二七年頃そこに住居を定め、それが私の第二の故郷となりました。

私も七〇歳という年齢を目前にして、最近は何も考えることが多くなりました。私にとって何よりの大事件はやはりソ連型社会主義の崩壊という事象です。私は青年の頃から社会主義こそが人類の理想であり、人類をあらゆる不幸から救うものであると信じてきました。そのためには牢獄も死もいといはせぬ、そう考えて生

きてきました。昭和五四年頃でしょう、私は世界労連の執行局員という役を仰せつかり、約七年間、ソ連、東欧、ヨーロッパにたびたび行き、実際の社会主義をこの眼で見て、この社会主義ではダメだと確信するようになりました。その大分前ですが、フルシチョフが



1961年世界労連大会、モスクワの宿舎で、右筆者

ら、そうではない、私たちはこういう方向で真の社会主義に進むのだというビジョン、理論、政策、実践がじゅうぶんには明らかにされていらないように思われます。そういう意味で、今は模索の時期かもしれないかもしれません。この模索の期間は一定期間続くのだろうと思います。

しかし私は信じているのです。民主的運動は必ずや資本主義体制をのりこえる理論と実践を実現するだろうと。そうでなければ、人類は亡びてしまうのではないかとさえ私は思っているのです。環境問題一つをとってもこのままでは駄目だということを、環境は私たちに強く迫ってきています。私たちの生き方、働き方の転換を求めています。「経済成長論」を根幹とする大量生産、大量消費、大量廃棄というやり方、これこそが資本主義の重要なやり方なのですが、これを克服しない限り環境は基本的には守れないと思います。

私は十年前程から「人類の危機」という問題について真剣に考えるようになりました。そして「人類五つの危機」これをどう克服するかというテーマでたえず話をしてきました。その内容は、あとで私の話の重要なテーマとしてお話しするつもりですから、ここではこれ以上のべませんが、世界労連の大会でも、総評大会でも私はこのことを強く主張しました。その頃の総評

スターリンの圧政について報告を行った頃から、この問題、つまり「真の社会主義とは」というテーマがい

つも私の頭の中で大きな比重を占めていました。だからソ連・東欧の社会主義の崩壊は最悪のシナリオとして覚悟もしていました。しかし実際に崩壊してみると、毎日のその関係のニュース報道を見るのもやり切れなくて、ついスイッチを切ってしまうこともあります。

今では、ソ連型社会主義は基本的には社会主義ではなかった、偽物であったのだから崩壊した方がかえってよかったのだと考えるようにしています。何故なら崩壊したモデルとその理論とはつきり訣別することができるからです。

こんな風に話をすると、ここで私が社会主義論を大上段から展開するのかもしれないかもしれません。そうではありません。私のやってきた労働組合、協同組合などの大衆運動を通じて「社会変革」にどう近づいていくのか、あるいはどう準備していくのか、まあそんな問題について大衆運動の側から考えてきたことをお話ししてみたいと思います。

日本でも世界でもそうですが、ソ連の崩壊以後、資本主義が勝ったのだ、社会主義は駄目なんだという風潮が強まっています。これに対して民主的運動の側か

の事務局長は富塚氏で、彼は「社公路線」でハッスルしていました。この富塚路線に私は危険を感じていたので、彼とたびたび話合って、この路線を転換させるべく、「人類の危機論」を話しました。彼も「よしわかった、それで行く」ということになるのですが、結局は挫折してしまうのです。これも軌道に乗っていたら、その後の日本の歴史はすこし違った歩み方をしていただかもしれません。

さきにも少しお話したように昭和二五年、私が二八歳の頃ですが、全日自労という労働組合の運動をやるようになって、それが今日も続いています。私は今も全日自労の松阪支部の委員長をつとめています。ふり返ってみると、この労働組合の運動が四二年も続いているのです。この運動が私の原点となっています。この実践から多くのことを学びました。それは、はかりしれない程のものです。今から六、七年前に「労働組合のロマン」という本を書いて、私なりの中間総括をしました。さいわいなことにこの本は、この種の本としてはよく売れました。ある大きな書店のトップセラ―となったこともありました。この本で、私の生い立ちからはじめて、全日自労の運動から学んだことを書きました。この本のなかに、私たちの運動をわりとよく表現している文章があるので、少し長くなります

が、最後にそれを引用しておきます。

これから十回になるか、あるいはそれ以上になるかもしれませんが私がお話することは、半ば追想、半ば提言ということになると思います。日本の民主的運動を發展させ、社会変革を実現するために何が大事なのか、それを実践家の立場からお話したいと思えます。強い思いがあるので、つい提言的な話が多くなるかもしれませんが、頑固な活動家のひとりごとと御容赦ねにしたいと思います。もちろん誰でも自分の頭で物を考えているのですが、教条や公式にとらわれて現実から遊離したり、肝心の時に動揺して自分の意見をもてない、また他人の考えにすぐ左右されてしまう、こんな幹部や活動家を私はたくさん見てきました。順序としては、人類に迫っている危機の問題からお話するのがよいようにも思いますが、これでスタートすることにしましょう。

* なかまから痛む心をいやされる日々

——心の通いあう労働組合運動

松阪分会では、私が帰ってきたことを心からよろこんでくれるたぐさんのなかまにむかえられ、私は痛んだ心をいやすことができました。それからまた、なか

またちとたたかいに明け暮れる日がつづくのです。私が二度目の本部づとめをするのは、昭和三三（一九五八）年からです。五年間を県支部と分会で活動したことになります。

なかまは貧乏の苦しみにたえて、明るく、ほがらかに笑った。

私の職場は「篠田山」という山を切り開いて「墓苑」をつくっていました。一〇〇人以上のなかまが働いていました。毎日といってよいほど職場集会をひらきました。いまはもう見かけなくなりましたが「トロッコ」と呼ばれる箱に土を一杯いれて、線路の上を押して走り、目的地でその土をあげて埋めたてをしていくのです。私はこのトロッコ押しをよくやりました。これはそのころの土方仕事の代表のような作業で、今日ではダンブとブルドーザーにすっかりとってかわられてしまいました。「モッコかつぎ」もよくやりました。土を一杯いれた「モッコ」を天秤棒でかつぐのですが、私は小さいときから家のまわりの畑の胡瓜、茄子に「水こやし」をやる仕事をさせられたせい、天秤棒にはわりと強く、よく競争して運びました。「こすやん」という女性はこのモッコかつぎが得意で、私たちに負けなほほどでした。

私は横着でしばしば弁当をもっていきません。する

と、なかまが自分のをけずって昼食のカンパをしてくれます。犬の肉がおいしいことを知ったのもこのときでした。貧乏ななかまたちのたんばく源は、モツ、犬

の肉、それに「筋」といって肉の髄をやわらかく炊いたものでした。犬の肉を時間をかけて水だきして、シヨウガ、醤油、砂糖でいりつけるのですが、それがとてもおいしいのです。

「五洲さん、今日のは牛肉のシヨウガ焼だよ」

そういって、「うまい？」ときくのです。私が「うん。うまい」と答えるとみんなが手をたたきます。私はしばらくしてその肉の正体を知るのでした。

なかまのつくる「茶がゆ」も私の好物でした。

なかまのなかには、未亡人、赤線あがりの女性、失業した靴職人、刑余者など、さまざまながいいました。それぞれ人生の苦しみをなめつくしてきた人たちでした。しかし不思議と明るく「メソメソ」していません。さきにも述べた「こすやん」という女性は未亡人でしたが、力もちで頑張りやでした。「モッコ」をかついで男にまけません。「額に汗する労働」が、そして「就労事業制度」がなかまたちの「精神的荒

廃」を防いでいるという私の主張はこういう体験から生まれているのです。

保険や生活保護をもらって、ブラブラしているのと比べてみて下さい。

なかまたちは私を「五洲さん」と呼び、委員長と呼びません。「心の通いあう労働組合運動」を追求していた私には、そのことがたいへん気に入っていました。

運動、つまりたたかいはなかで、なかまの「意識」が変化していくのがよくわかりました。はじめのころは、「労働組合」とか「団結」ということを私が説明しても、半信半疑の人が多かったのです。

しかしなによりも「体験」を通じて、なかまは労働組合に団結することの意義を知っていききました。

なかまに話すとき、私は「眼」をみて話します。なかまの眼がすこしずつ輝きをまわしているのを見ると、私は生きがいを感じていました。

（筆者は現在、中高年雇用福祉事業団（労働者協同組

合）全国連合会理事長）

自分の頭でものを考える



民主的な運動を進めていくうえで、「自分の頭でものを考える」ことがどんなに大切なことか、はかり知れないほどだと私は考えています。ということは、自分の頭でものを考えない人が大へん多いということでもあります。

教條や公式にとられ過ぎる人、自分の実践経験を一般化できず、経験主義になっている人などを私は多く見てきました。そのような人は自分では一所懸命やっているつもりでも、成果は芳しくないという結果を招きがちです。私は「教條」を否定する気は毛頭ありませんし、実践・経験を何よりも大切なものだと今も考えているのですが、さきへのべた人たちに共通している欠陥は自分の頭でものを考えることができない

ことです。よく考えてみると、「組織」は沢山の人間を一定の目標、要求のもとに団結させて、一人の人間にはできないことを実現していく力をもっています。だからこれからも組織はますます重要なものとなっていくに違いありません。人間の歴史とは自らをよりうまく組織化する経験の蓄積と発展であるという見方もできるかもしれません。

しかし、組織はもう一つの側面をもっているようです。つまり組織の思い通りになる人間をつくり出しがちだという点です。組織には運動の理念、目標、活動のルールをもつ必要があることは当然ですが、組織の構成員の発想や思想までを統制すべきではありません。

ん。これは絶対やるべきではありません。むしろ逆に、自分の頭でものを考える人をつくり出すことがその組織の発展にとって決定的に重要なことです。そんなやり方をすれば甲論乙駁になって収拾がつかなくなるとか、組織の統制力が弱まるではないかという反論が出るでしょうが、自分の頭でものを考える人、自分の意見をのべられる人を沢山かかえていることは、その組織の生命力、発展力を意味しています。

私も長い間委員長とか理事長とかいう役職をやってきたので経験があるのです。自分が正しいと思って提案した方針に反対されたりすると、ついカッとなってその意見に反論するのはよいのですが、「奴は反組織を企んでいるのではないか」とついカンぐったりしたくなる時もあります。勿論反組織を企む人もいないわけではありませんから、その正しい判別は必要ですが、出された反対意見について真剣に討論をする態度が何よりも必要であります。また反対意見を出した人を異端視したり、陰に陽に圧迫を加えたりすることは絶対にするべきではありません。トップがそういうことをやり出せば、その組織はイエスマンの集団となり必ず生命力をなくしていきます。そのよい例が旧ソ連です。ソ連では、反対意見を出せば、社会主義の敵という烙印をおされて、悪くすれば刑務所ゆき、死刑、重

労働、それほどでなくても左遷、地位はく奪等が日常茶飯事だったので、誰れも「本音」は言わなくなり、空虚な「たてまえ」だけがこだまする社会が生命力を失ったのは当然のなりゆきと言わなければなりません。ソ連社会主義の致命傷は、討論できる民主主義がなかった点にあると私は見えています。民主主義が組織にとって如何に重要なものであるか、それは「組織の生命力の根源」であると言うことができま

す。その民主主義の原点とは、ひとり一人が自分の頭で考え、自分の意見をもつこと、そして討論することができることだろうと思います。

この民主主義の問題は、今回の私の話の中心テーマの一つでもありますので、項を改めてのべることにします。

さて、自分の頭でものを考えるということについて、私の経験を少しお話しします。

私が小学校の三、四年生の頃、私の家に大きな事件が起きました。それは兄の中西功が上海で、反日運動（日本軍国主義の中国侵略反対運動）に参加して逮捕され、東亜同文書院を退学処分になり、内地に送還された、東京でもまた逮捕されたのが新聞に報道されたのです。私の家は小さな地主で、父は保守的な考えの人でしたから、この事件は大へん衝撃的でした。

兄は家族の信頼をえていましたし、私は兄をとてても好きでしたから、兄が悪人とはどうも思えません。しかし私の家には毎日特高刑事がきて兄の行動を監視する日が続きました。学校の帰り道、その刑事に会うと、私は近道を全力で走って帰り、兄に「刑事がくるよ」と教えるのでした。すると兄は読んでいた本を手早く隠すのです。

この頃から私は、自分の頭でものを考えることをせまられました。私の関心は「戦争」のこと「貧乏」のことでした。学校で先生達が話す満州事変、上海事変のことと兄から聞く話では全く逆でした。兄は、日本軍は中国の人たちをたくさん殺し苦しめているという話をしました。

「何故金もちと貧乏人があるの？」と、私はよく質問をしました。というのは学校へ通う途中に三〇戸ぐらいの部落があり、そのなかに七軒長屋がありました。毎日、そのそばを通るのですが、この長屋には戸がなく、藁がつるしてあつて家も傾いています。赤貧洗うが如しとはこのことを言うのでしょうか、どうしてこんな不公平がおこるのだろうか、少年の正義感には、このことが許せませんでした。貧乏の問題はそのこずうつと私のテーマとなりました。小さい頃から特殊な環境で育ったせいでしょうか、

私はどんな偉い人の話でも盲信しない、疑ってかかり、自分が納得する迄考えるようになっていました。だから自分の頭でものを考えるということの第一歩は盲信しない、疑ってみること、そして事実と正しく合致しているかを自分が納得いくまでものごとの連関を追求することだと思えます。

しかし、自分の頭で考えるということはこれだけではじゅうぶんでないことが、だんだんとわかってきました。それは、全日自労の運動をやるようになって大きな壁にぶつかったからです。当時の自労の仲間たちは戦争でいためつけられ、失業と貧乏でドン底の状況でしたから、アブレ反対、賃上げ、盆暮の手当などの切実な要求をもっていました。その切実な要求を皆の力で断乎としてかちとること、これが労働組合運動だと私は確信していましたから、その方向で全力をあげて闘っていくと、その闘争は経済主義的偏向だと言って私を批判するのです。権力闘争が明確になっていないとか、政治闘争に発展させないとか言って、当局や警察との必要以上の摩擦を煽動するのです。ある人は、今こそ武装闘争だとさえ言いました。このため私たちの運動は、二度、三度と危機的状況を迎えるのです。このような指導に対して私はいへん危険を感じていましたから、本能的に対処し、危険をさけるよう

に行動しました。しかし「かん」や常識だけで行動する

のはいかにも心もとない。しっかりと理論を身につけたいと、本をさがし、読みあさりしました。そのうち、大衆運動を進める上で、「こずうすれば必ず成功する」、「こずういうやり方をすれば必ず失敗する」というものが存在していることを、私は実践的に知るようになります。これは一体何なのか、それこそ大衆運動のなかにある「法則性」ではないかと考え、その法則性を明らかにするために全力をあげました。それを「大衆運動の法則性」ともづく指導」という論文にまとめました。この論文を書いてから約三〇年近くが経過しましたが、今読み返してみてもそんなにおかしくはありません。上からの指導は左へよったり、右へよったり誤りをくりかえしていましたが、人間の集団的運動に働いている法則性という視点を大切にして私は運動を進めていきました。

ところで、自然科学では科学者は自然の法則についての「仮説」をたて、その仮説を証明するための実験をくりかえして、一つの法則を発見していくのですが、社会科学、とくに人間の集団運動については、どういうわけかこずうという方法が確立していません。大衆運動のなかに法則性が働いているという視点すら確立していないように思います。これは民主的運動にとつ

て、大へん大きな損失であります。

私が「大衆運動の法則性」という視点を明確にもつことができたのは中国の劉少奇主席の「大衆組織の根本問題」という小冊子でした。これは実に素晴らしい論文です。残念ながら今はほとんど顧みられず、入手も困難だと思えます。この論文に教えられ、はげまされて私は「大衆運動の法則性」ともづく指導」をまとめたのでした。残念なことに劉少奇は文化大革命の犠牲となり獄死させられるのです。ソ連や中国の社会主義に劉少奇のような考えが貫いていたら、今日のような事態は絶対おこらなかつたと思えます。

話を戻しましょう。自分の頭でものを考えるということは、物事の運動の法則性を追求することである、これが私の結論です。弁証法的思考方法とも結びついています。この問題は人間の「自立」の基礎だと思えますし、「教育」の根本問題でもあると考えます。皆さんは自分の人生をふり返って、この問題にどう意識的にとりくんでこられましたか。

「大衆運動の法則性」ということについてその内容にはふれなかつたので、次回はそれをお話しようと思

大衆運動の法則性



先回の話で、「自分の頭でものを考える」ということは、どんな偉い人の話でもまず「ウノミ」にしないことだと話しました。これだけだと一言居士になりかねません。一言居士というのは、人の説に対してケチをつけるが、自分からは積極的提案ができない人のことを言います。一言居士に終らないためには、「現実を注視すること」、「現実の運動法則」をしっかりと掴むことが必要であります。その例として、私が大衆運動のなかで、「大衆運動の法則性」を追求した経験を若干話しました。

大衆運動のなかにはいくつかの重要な法則が働いています。大衆運動を成功させようと思うなら、この法則性を研究しなければなりません。しかしこの研究が

大へん遅れているというのが、五〇年近くを大衆運動に従事してきた私の実感なのです。

大衆運動は、労働組合、協同組合を始め、平和運動、政治、経済、文化運動などに、草の根的運動を加えれば、国民のほとんどが何らかの形で参加している巨大な運動であります。この巨大な大衆運動を貫いている法則性を研究し、一つの「科学」として確立することは、民主的運動に参加している人々の責任だろうと思います。

それだけに大衆運動の法則性についてのべることは重いテーマであり、一個人の手にはおえないのですが、私が実践してきた労働組合、協同組合の運動のなかで、私なりにつかんだいくつかの法則についてのべ

てみたいと思います。

第一は「要求発展の法則」と私が名づけているものです。第二は「自発性の法則」で、これは「やる気の法則」といってもよいでしょう。第三はリーダーシップの法則です。

今回の話はすこし理屈っぽくなるかもしれませんが。しかし大衆運動はほとんどの人がかかわっている問題だし、自分の関係している大衆運動をどうすればより発展させることができるかで皆な悩んでいるわけですから何らかの参考になると思います。

大衆運動のなかに働いている法則性は、自然界のなかに働いている法則と違いがあります。自然界の法則である重力の法則を考えてみても、地球上では石はどこでも、誰がやっても落下します。石が上へ落ちるということはありません。しかし人間の集団運動の一つである大衆運動では、こういう形では法則は貫きませぬ。一定の条件がととのった時に法則が働くのだと思えます。この点は後でまた補足したいと思えます。

さて第一の「要求発展の法則」についてのべましよう。要求にはいろいろの区別があります。政治的要求、経済的要求、文化的要求、平和のための要求などです。さらに全体に共通する要求とそうではない個別の要求の区別もあります。切実な要求とそうでない要

求の区別もあります。また、低い要求と高い要求の区別があります。大衆運動というのは切実な、共通の要求を基礎としてすすめられるのですが、そこでは低い要求から出発してより高い要求への運動として発展していく性質もっています。一度に高い要求をもち出しても、大衆は相手にしてくれません。自分達の力で要求をたたかいた経験がないから展望がもてないのです。だから私たちはどうしても低い要求から出発せざるをえないのです。そして一番大切なことは、その要求を皆の力で実現することです。そこから自信が芽ばえてきます。そしてつぎのより高い要求の運動へと進むことができます。要求の実現がなければ、この「要求発展の法則」は働きません。これが自然界の法則とのちがいだと思えます。

私の経験を若干お話すると、昭和二五年に三重自由労組をつくった時、皆の中心的な要求は「お盆手当一千元の支給」でした。これは準備不足と警察の弾圧のため失敗するのですが、つぎの越年手当を上げしいたたかいたの末、とうとう実現するのです。これで、幹部も組合員も自信ができ組織は固まり、今度はアブレ反対のたたかいにとりくめるようになりました。手当は千円から出発して二千元、三千元と毎年要求を發展させ三四年で一万円の手当を獲得しました。これは全

国最高の手当で、朝日新聞が一面で報道する程でした。そして昭和三三年頃には「公務員なみの手当」支給を県と七市の間で協定するまでになりました。要求の量的発展もさることながら質的发展を見のがすことができません。そして平和闘争、安保反対闘争のこの地域での推進力の一つとなるまで成長しました。こういう要求の発展は組織の発展、闘い方の発展、組合員と幹部の意識の発展を要求しました。松阪で市と職安を相手にどれだけはげしく闘っても限界がある、県下の各市を組織しようと手わけして、手弁当で出かけ、県連合会をつくり、県を相手に「全県統一闘争」ができるようになりました。これが要求実現を大きく発展させました。そして対県の闘いだけでもやはり限界がある。失対制度は国の制度で、賃金などの就労条件はすべて国が予算のなかで定めるのだから、国と交渉できる全国組織をつくろう、そして「全国統一闘争」をやれるようにしよう、これが皆の方針になっていきました。

こういう考えを持っているところが集まって、昭和二八年に全日自労の実質的な全国組織がつくられ、私が初代の中央委員長に選ばれ、私の苦難の旅が始まるのでした。

この頃から私は「要求発展の法則」を実践的に検討

間温めてきたテーマがあります。それを皆さんにも一緒に考えてほしいのです。

それはレーニンの「何をなすべきか」という著作です。これは最近まで大衆運動のバイブルのような役目を果たしてきました。私も何度読んだかわからない程度です。運動がわからなくなると、これを読みました。当時大衆運動をやっていた幹部の多くはそうだったと思います。

この著作のなかに有名な「外部注入」論というものがあります。大衆運動には正しい科学的視点や方針を外部から注入しないといけない、この注入する役目を外部的に労働者階級の前衛である党だと言うわけです。たしかに労働組合は自然成長的要素を多くもっています。党の方がより目的意識的であり、科学的視点にたっていることも事実です。しかし、目的意識性や科学性が党だけのものであり、大衆運動が自らの必要から、目的意識性や科学性をもつことができないというのは独断だろうと思います。こういう理論からソ連型社会主義では、大衆組織の独立、独自性が犯され、党支配が合法化されていったように思います。

こういうレーニンの考えは、私が実践してきた大衆

していましたが、「経済主義者」と公然と批判されてもひるみませんでした。そういう人こそ大衆運動の法則性を知らないし、そういう指導は早晩破綻すると信じていました。

事態はまさにその通りに進みました。その人たちの理論も姿も今はあとかたもなく消え去っています。法則性を探求するものは強いのです。

しかし私は決して今の状況が安心できないのです。大衆運動の法則性という視点がしっかり確立していないように思えるからです。この視点が明確になり、法則性が明らかにされていけば、日本の大衆運動は大発展をとげ、この国を革新する原動力となることは間違いないと思います。

いまの日本の労働組合運動も協同組合運動も文化運動も平和運動もそれぞれ大きな難問をかかえて伸び悩んでいます。いや壁にぶつかっていると云った方がよいかもしれません。労働組合組織率が年々さがっているのもそのあらわれです。大衆運動の法則性という視点で、これらの諸運動の発展方向を検討することは大へん意味があるように思います。私たちが昨年創立した「協同総合研究所」はこの問題にもとろくくみたいと考えています。

さて、大衆運動の法則性にかかわって、私が三〇年

運動の法則性という考えと合致しません。さきにあげた中国の劉少奇主席は大衆運動の法則的发展という考えを明確にのべ、法則性を掴まなければ大衆を組織することはできないとのべています。レーニンと劉少奇では全く好対照をなしています。レーニンには、大衆運動の法則的发展という考えはありませんから、結果として大衆組織を軽く見、党を重く見すぎるといふことになったように思います。よく、レーニンは正しかったのだが、スターリンがねじ曲げたと言う人がいます。私はそうではなく、ソ連型社会主義の理論的枠組みをつくったのはレーニンであり、その理論に弱点、相当大きな弱点があったからこそ、この社会主義は一定の成果をあげながらも、内部崩壊せざるをえなかったのだと思います。「何をなすべきか」の弱点をえぐり出し、大衆運動の法則性という視点と、その法則性を具体的に明らかにすることが、当面の緊急事のように思います。

要求発展の法則についてすら十分のべることができないまま終りにきてしまいました。「大衆運動の法則性」はいずれ一冊の本として出す予定です。今回は「人類の危機」についてのべたいと思います。

人類の危機

現代の中心問題は人類の生存がおびやかされていることだと私は見えています。最近では環境問題が大きな問題としてクローズアップされるようになり、人類の危機を身近に感ずるようになってきました。環境問題もとても重要な問題ですが、人類の危機はそれに尽きるものではありません。

私は十年前から「人類五つの危機」、それをどう克服するかという問題提起をしてきました。その頃は、ピンとこないという感じで聞いている人が多かったように思いますが、今は相当現実味をおびてきています。

五つの危機について若干の説明をします。

利潤原理体制の危機

第二の危機は「南北問題」に象徴されているように、「利潤原理」体制がつくり出している危機です。すでに御承知のとおり、世界人口五四億人の約八割が発展途上国に属しており、そこでは飢餓、貧困、大量失業、爆発的な人口増加が進んでいます。このような南の国ぐにの困難は、利潤原理の体制、つまり北の国ぐにがつくり出してきたものです。

最近、外国人労働者受け入れの問題が大きな問題となっていますが、これも南北格差から必然的におこってくる問題です。この地球を家族に譬えれば、二人は飽食しているのに、八人は飢餓と貧困にあえいでいるわけですから、この家が安泰であることはできません。北の国ぐにも問題が山積しています。アメリカ、ヨーロッパの諸国では失業問題が深刻になっています。世界の憲兵を演じてきたアメリカは膨大な軍事費のために借金大国となり、経済もうまくゆきません。

日本でもバブル経済のなかで、私たちは利潤原理体制の本質をイヤというほど見えました。株や土地への投機によって、濡れ手で粟の大もうけをたくさんだ銀行と大企業の少なくない部分は今深刻な危機におちかっています。勿論、投機が「利潤原理」体制のすべ

核戦争の危機

第一は核戦争の危機です。二つの軍事ブロックにわかれての対立、抗争は核戦争の危機を焦眉の問題としておりました。核戦争がおきれば人類の破滅は誰の眼にも明らかですから、核廃絶を実現し、軍事ブロックを解体していくことが重大な課題でありました。

ソ連の崩壊によっていわゆる冷戦体制は終わったとされていますが、そもそも世界を二大軍事ブロック化して行った根底には、アメリカを中心とする「利潤原理」体制の世界支配の意図があったと思います。それは基本的に残っているのですから問題は依然として解決はされていないのです。



てではありませんが、儲けるためには、どんなことでもやつのけるという彼等の本質をリクルート、佐川急便などの事件で私たちはイヤという程見せつけられました。

人間破壊の危機

第三は利潤原理体制は、人間そのものを荒廃させている、いや破壊していることです。利潤原理体制はどうしても「自分さえよければ」という人間をうみ出します。もう一方では、自立的ではなく、つまり自分の頭で物を考え、行動できない依存的人間をつくり出します。企業人間といわれているのがその典型でしょう。また「過労死」に象徴されているように、肉体破壊も深刻になっています。あとでのべる環境の悪化は人間の存在そのものを脅かすまでになっています。「儲け主義」の悪魔においまわされて、人間は本来の人間性、人間らしさを失いつつあります。これは教育、文化の危機としてもあらわれています。退廃的、非人間的文化の横行、青少年の深刻な受験戦争など、ここらあたりで真剣に考えなおさないと人間はダメになってしまいます。

人間が「自立・協同・愛」の心をとりもどすことが何より大切だと私は考えているのです。いずれ頂を改

めて、この問題を話すことにします。

環境の危機

第四は環境の悪化です。この問題は毎日のように新聞、テレビでとりあげられるようになりましたから、多くを語る必要はないでしょう。水、空気、土地という基本的なものの汚染が進んでおり、生態系の破壊、酸性雨、砂漠化、温暖化、廃棄物汚染など、人間の存在を不可能にするような事態が進行しています。テレビや新聞を見ていて感ずることは、この環境破壊の真の原因を明らかにしないことです。国民全部に責任がある、ひとり一人の心がけが大切だというような論議が多いように思います。たしかに私たちのいまの生活様式に問題があることは事実です。しかし便利、快適車を売り物にして、「消費は美德」などといって、自動車をはじめとした大量消費社会をつくり、われわれをそこに誘導し、それでしつかりと儲けてきたのは、他ならぬ大企業などの利潤原理体制なのです。従って利潤原理体制を変革しない限り、環境の破壊をくいとめることはできないのです。

資源の枯渇

第五は資源・エネルギーの枯渇の問題です。石油も

鉄も石炭もその他の資源も枯渇してきています。他方人口増加の勢いはとまりません。人類全体の消費量はふえる一方です。石油資源もあと何十年ではなくなると予想されています。地球資源が有限であることは明らかであるのに、利潤原理体制は資源を浪費する本質をもっています。何故なら利潤は売らなければ増大しないのですから、自動車の新車の買い替えのように、新型、モデルチェンジを繰り返して資源の浪費をやります。資源の枯渇が目前にきているのですから資源の再利用、リサイクルが不可欠となっているのです。しかし廃棄物は埋めたり焼いたりして十分再利用されず、環境悪化の原因ともなっています。なぜリサイクルができないのか原因を調べてみると、資源の再利用はコスト高になって、企業競争に破れてしまうのです。ここに利潤原理の根本的弱点を見ることができません。また軍事費に使われる資源の浪費を見ることができません。その額は世界全体で一年間に八千億ドルとも計算されています。こんなことをやっていると、天のむくいを受けないですむ苦がありません。以上が私の五つの危機論のごくあらましです。私は大雑ばに五つと言いましたが、実はそれは複合的な危機です。政治、経済、教育、文化、人口問題など、複合的な危機ですから、核問題だけを特別に強調した

り、環境問題だけを特別重視するということにはならない危機だと私は考えています。その危機をつくり出している主な原因は何なのか。それは利潤原理体制だと思います。つまり、資本主義体制のことです。この体制は儲けること、つまり利潤の獲得とその増大を原理としています。この原理を変革しなければ、人類を破滅から守ることはできないのではないのでしょうか。

ソ連型社会主義の崩壊という大へんな事態を迎えて、社会主義はダメなんだ、資本主義の勝利だという論調が世界を駆けめぐりました。とんでもない話です。その資本主義は私たち人類を破滅の方向に導いているのです。

ソ連型社会主義はたしかに、利潤原理への挑戦でありました。自由、平等、平和、博愛という人類の理想への挑戦であったことを疑うことはできません。しかし、この社会主義は致命的弱点をもっていました。それは「真の民主主義」の理論と実践をもっていなかったことです。私たちが、ことを始める場合、人々の意見はさまざまにわかれます。賛成、反対、中立というふうに分かれるのが普通です。この意見のちがいを、討論し、合意をつくりあげていくのが民主主義の本質だと私は考えています。そのような民主主義を私は「徹底民主主義」とよぶことにしました。

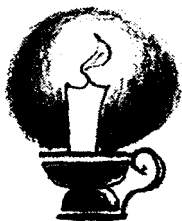
ソ連では異論はすべて社会主義の敵と見なされ、討論する自由も、合意という視点もありませんでした。これでは全くの独裁体制ですから、いわゆる自由主義陣営に対抗することもできません。

レーニンの「国家と革命」を見ても、権力規定に問題があるように思います。権力とは何か。レーニンは、警察・裁判所、軍隊などの抑圧機構だという点を強調しすぎています。

話がすこしそれましたが、私が今いちばん気にしていることは、民主的運動を推進している人たちが、人類の危機をどう認識し、運動の中でどう位置づけているかということです。念のため、どこでもよろしい労働組合でも協同組合でも、その運動方針に、この人類の危機がどう書かれているかを探してみてください。これでは運動が見当はずれとなっていくのではないのでしょうか。私たちは、どうすれば人類の破滅をくいとめることができるのでしょうか。それには利潤の原理にかわる新しい原理が必要です。ソ連的な原理ではなく、新しい原理は何か、それは「協同の原理」だろうと思います。今回は協同の原理についてお話ししたいと思います。

(中高年雇用福祉事業(労働者協同組合)全国連合会理事長)

協同の原理



利潤原理

人類の危機についての私の考えを大急ぎでのべてきました。が、とても三千字、四千字で説明できるものではありません。この人類の危機をひきおこしている主な原因が利潤原理とその体制であると私は考えています。「利潤原理」という言葉がそう一般的になつていくわけではありませんが、それは資本主義のことです。資本主義の特徴を市場原理、競争原理、自由主義などと、とらえる論もありますが、資本主義の中心原理はやはり利潤原理だと思います。利潤原理とは最大限の利潤を追求してやまない体制のことです。しかもその利潤が一部の個人資本家や法人大資本家に集中し

ていくことです。この利潤原理体制が新しい市場を求めて、過去の世界戦争の原因となったこと、さらに貧富の差をうみ出し、深刻な階級対立をうみ出してきました。バブル経済での土地・株などへの投機に走った銀行、企業などのなかにピンチにおちいつているところが少なくないと言われているように、これなどは利潤原理の本性むき出しの企業活動がいま猛烈なしつぺ返しを受けているところです。

しかしいけばん問題なのは、利潤原理の害悪は人類存亡の危機をひきおこしていることです。利潤原理を克服しないかぎり人類に展望は開けてこないと思います。これが私の新しい問題提起です。利潤原理が人類危機をひきおこすメカニズムについて、環境破壊を切

り口にして考えてみるとある程度は理解できます。利潤原理は利潤増大のために「経済の成長」を必要とします。生産を拡大し、売上げを増やさなければ利潤は増えません。大量生産、大量消費、大量廃棄が必然となります。このようなやり方はとくに大量消費、大量

廃棄は当然環境を破壊します。それですべてとぼしくなっている地球資源、エネルギーを枯渇させます。それだけではありません、利潤を確保し増大させるために企業は競争力をつけることが必要となります。技術革新と生産性向上によるコスト切り下げが至上命令

となります。こういうところから過労死、あるいはそれに近いストレスといった生活が働く人たちらを襲っています。この問題を氷山にたとえるなら、過労死は

氷山の露出部分であって、心身症、職業病、労働災害など奥深い健康破壊が進んでいます。

利潤原理の総本山である大企業は、自民党とゆ着し、最近だけでもロッキード、リクルート、佐川急便と大汚職事件を引きおこし、さらに教育、文化も彼等の支配のもとで大きく歪められています。

利潤原理が人類を破滅の方向に導いているメカニズムを、環境だけでなく、全体としてしっかり掴むことがいま、とても大切だと私は思うのです。その次には、この人類の危機を克服するための壮大なたたかい

のプログラムが必要となります。そのためには利潤の原理に代る新しい原理を必要とします。それが「協同の原理」だろうと思うのです。

協同の原理

いまの社会を貫いている利潤原理に対置されるべきは「協同の原理」だろうと思います。協同の原理という言葉が日本で使われ出してからまだ二、三年しかたっていない。協同組合原則は古い伝統をもっていますが、それと同じものではありません。利潤原理体制を変革するための新しい原理ですから、考えて見れば大へん重要な問題提起です。それは同時に人類危機を克服するものでなければなりません。

この問題についてはこれからもたくさんの実践や研究が積み重ねられて完成されていくものと思います。

ここで私が提起できることは協同の原理を考える視点というようなものです。これは私の五十余年の実践運動の総決算でもあります。私は戦時下で二〇歳の時、治安維持法違反で警視庁に逮捕され、懲役三年の実刑をうけ、服役中敗戦を迎え、マッカーサーの政治犯釈放指令で出獄し、民主的運動に参加しました。この間ずっと日本の変革について考えながら実践運動をすすめてきました。勿論自分の頭で考えるように努力し

てきました。

協同の原理について、私は二つの視座から考えてきました。一つは日本の現実と実践から考えるということ、もう一つはソ連社会主義の経験から考えるということです。ソ連社会主義は私の人生にとって長い間希望の星でありました。だからソ連党史は何回読んだかわからない程です。失敗したとは言えソ連社会主義は人類の理想への壮大な挑戦でありましたし、その失敗の経験から私達が学ぶことは多いのです。利潤原理、ソ連社会主義の原理、協同の原理、この三つを比較検討するなかで協同の原理が成長してきました。

協同の原理を考える視点

一、人類危機を克服する視点

人類の危機を克服することが現代の中心問題だと私は考えています。私たちの民主的諸運動の中に、この視点がしっかりと据えられると、労働組合でも、協同組合でも、おそらく全解連でも運動の進め方が違ってくる筈です。

二、協同組合を重視し、企業変革を進める視点

現在の日本は企業社会であり、利潤原理は株式会社に代表される企業活動がキソとなっています。とくに

大企業（銀行を含む）が経済は勿論、政治、教育、文化までも支配していると言っても過言ではありません。マルクスが解明したように、資本の根本的な目標は、利潤の増大、蓄積であります。佐川急便のように労働者にきびしい苛酷な労働条件をおしつけてあげた利益を自民党の政治家に湯水のように注ぎ込んで、政治を利用してさらに企業を拡大しようとする意図は、やり方に多少の相違はあってもすべての利潤企業に共通のものであります。まさにこれこそが諸悪の根源であります。したがって企業の変革なくして、日本の変革はないと思います。この企業変革のために、労働者が主人公となって企業を所有し、運営し管理する労働者協同組合が重要だと思います。私たちは十年以上の試行錯誤のなかで、ようやくこの運動の基礎をつくることができました。全解連の地方の幹部もこの運動に参加し、光、神戸では成功しています。次回には私達の労働者協同組合の経験をのべたいと思います。

三、徹底民主主義の視点

ソ連社会主義ではプロレタリア独裁、計画経済（指令経済）、国有国营方式という方向が進められました。プロレタリア権力を確立し、その権力の力で工業、商業はすべて国营企業化し、農業はコールホーズ（協同

組合農場）と国营農場化を進めました。経済も社会もすべて指令で動くシステムが事実上つくられ、国营企業でも、そこで働く労働者が企業的主人公となることはありませんでした。ソ連社会主義の致命傷は、前にものべたように本音で討論できる民主主義を創造できなかったことです。異論を社会主義の敵として抹殺したわけですから、恐怖政治そのものです。こんな中から新しいものは生まれません。徹底民主主義については、私たちの民主的運動にとっても基本的なものだと考えます。徹底民主主義のような基本的な道を通じてのみ、働く人々が企業、地域、社会の主人公になりうるのだと思います。徹底民主主義については稿を改めてのべることにします。

四、自立・協同・愛の文化創造の視点

利潤原理がつくり出した社会は、先進国について考えれば、たしかに人間の物質的生活を豊かにしました。しかし精神生活は極めて貧しいものになっているのではないのでしょうか。金、金、物、物、利潤・効率に人間は追いまわされ、いつのまにか、物質的な豊かさのみを追い求めるようになっていきます。利潤原理はまた、「自分さえよければ」という利己的人間、あるいは会社人間といわれる自立（自律）的ではない人間

をうみ出しています。経済成長論者のように物質的な豊かさのみを追い求めることは環境、資源の面からも、また南北問題つまり何十億という貧しい途上国の人たちの状況を考えても、許されなくなっています。人間の幸せとは一体何なのかを私たちは改めて問い直さなければならなくなっています。

自立、協同、愛の人間成長とそれを支える文化をつくることではないのでしょうか。これは利潤、効率を第一とする利潤原理体制ではできない相談だろうと思います。

紙面の余裕がありませんので、必要な視点を列挙するにとどめます。

五、自由と平和を守りぬく視点

六、町づくり、地域づくりの視点

七、人類を守りぬく協同戦線の視点

今回は労働者協同組合についての私達の実践についてのべたいと思います。

（中高年雇用福祉事業（労働者協同組合）全国連合会理事長）



労働者協同組合

労働者生産協同組合

「労働者協同組合」——皆さんには聞きなれない言葉だろうと思います。正確に言ううと労働者生産協同組合です。労働者が協同して出資、運営、管理する民主的企業と説明すれば、大体のイメージは掴んでもらえると思います。

日本では労働者協同組合と言える企業はこれまで存在しませんでした。十年前程から私たちはそれに挑戦してきました。私たちが略称で「事業団」といつている、中高年雇用福祉事業団とか高齢者事業団とかそれが当ります。事業団と言うと、一般の方は政府がつくっている〇〇事業団と思われるようですが、政

府とは関係なしに、全く労働者や労働組合の力で作りあげてきたものです。全日自労という労働組合が職よこせ闘争のなかから生み出してきたものが事業団運動であります。だから事業団と労働者協同組合はほぼ同じものと考えてもらっていいと思います。

労働者協同組合の実践運動は日本ではいま始まったばかりですが、ヨーロッパでは古い歴史を有しています。マルクスの有名な共産党宣言のなかに共同工場という言葉がたびたび出てきます。これは労働者生産協同組合のことです。マルクスは労働者の生産協同組合を大へん重視していたことがわかります。消費生活協同組合はヨーロッパでも日本でも大きく発展するのですが、労働者生産協同組合はヨーロッパでもすくすく

とは成長できませんでした。これにはいろいろの原因があります。その一つだけをあげますと、ソ連型社会主義はこの労働者協同組合運動を邪道であるとして、第一は権力奪取、そしてその権力の力で国有・国営万能の指令経済を推し進めてきたのです。それが労働者協同組合運動をながく低迷させてきた原因ではないかと私は考えています。

近代的な経済を支えていくためには企業活動なくしては考えられません。その企業には三つの形態しか存在しません。私的（利潤）企業、公的企業、協同組合企業です。利潤原理体制を克服しようとするなら、公的企業、協同組合企業を強めていくことが必要となります。国有・国営方式はソ連の失敗からみても明らかになように限界があります。そうすると残された道は協同組合企業しかありません。

協同組合にもいろいろのタイプがあります。労働者生産（サービス）協同組合、信用協同組合、消費生活協同組合、共済協同組合……などです。住宅生協、子育て協同組合、障害者協同組合、文化協同組合、学校協同組合、産直協同組合、高齢者協同組合など日本でも各地で草の根的活動が活発になってきています。これはこれからいっそう大きな流れになっていくでしょう。

しかし、このなかで一ばん重要なのは、やはり生産協同組合だと思っています。利潤原理体制を改革するためには生産の協同組合企業つまり労働者協同組合を強めないでダメだと思っています。二一世紀は、労働者協同組合と各種の協同組合の大連合（協同組合セクター）と民主的勢力の連合によって下から上から社会を一步一步改革することになるだろう、私はそう確信しています。

労働者協同組合の七原則

労働者協同組合のイメージをより具体的に知ってもらうためには、私達が実践のなからつくりあげてきた「七つの原則」を見ていただくのが一ばん近道だと思います。

労働者協同組合の七つの原則

— 新しい生き方・働き方のために —

- 一、「徹底民主主義」を通じて労働者が企業的主人公になります。
- 二、よい仕事をし町づくりに貢献します。
- 三、皆なで出資し、事業計画をつくり、仕事を拡大して生活を向上させます。
- 四、労働と教育を基礎に「自立と協同と愛」の人間に

成長します。
五、全国的観点と変革の立場にたつて協同組合運動を
発展させます。

六、労働組合運動や地域の運動との連帯を強めます。
七、人類の危機を克服する運動を進め、国際連帯を強
めます。

この七つの原則のなかには、注目すべき言葉が五つ
あります。第一は労働者が企業の主人公になる、第二
は「徹底民主主義」、第三はよい仕事をする、第四は
「自立と協同と愛」の人に成長する、第五は人類の危
機の克服です。このなかでも働く人が企業の主人公に
なるというのが中心だと思えます。主人公は名実とも
に少なくとも四つの権限をもち、その権限を行使する
のでなければ、やはり主人公とは言えません。

四つの権限とは①企業の重要事項の決定権、②企業
の事業計画などの執行権、③皆なで稼いだ剰余金の処
分権、④役員などの選出権です。そんな企業がありう
るかと思われる方も多いと思います。現在の日本の企
業はほとんどが株式会社であり、働く人はその企業
（法人）に雇われるのであって、主人公になることは
永久に不可能のように運命づけられています。まして
トヨタのように年間五千億円の利益を出しても、処分
権など思いもよらないことです。この企業のあり方を

変革しなければ、日本の変革はありえないでしょう。
昔の私は、まず民主的政府をつくらう、その政府の力
で企業も、経済も変革できる、そのためには選挙が大
切である、と考えていました。

そのことの重要性は、その通りですが、それだけで
は、現在の自民党と大企業の連合体制を崩すことはで
きないでしょう。企業変革のための労働者と国民の大
運動が必要です。もちろんそれは人類危機を克服する
ためのさまざまな国民的運動の一つとしてですが。

現在の大企業のあり方を根本的に問う企業変革のた
たかいがとくに大切だと考えています。この企業変革
の運動を進めていく上で、労働者協同組合運動と各種
の協同組合の大連合は大きな意味をもっています。

私たちの労働者協同組合運動の現在の到達点は、事
業高で約一〇〇億円余、事業団数で約一〇〇、労働者
組合員数で六千人余ですから大海の一滴にすぎないよ
うに見えるでしょうが、時代の流れというか、時代が
要求している運動であることはまちがいがありません。

事業団運動の歴史

さいごに事業団運動の生いたちについて若干ふれて
おきます。事業団が生れたのは、全日自労の職よこせ
闘争のなかで、昭和四七年に兵庫県の西宮で市との交

渉で生れました。この運動が全国各地にひろがりました。
当時は中高年の人たちの働き口はとくにきびし
く、その人たちの対策事業であった失対事業の打切り
を政府が進めていました。全日自労は失対事業打切り
に反対の運動を進めるなかで全国各地で中高年の人た
ちの職よこせ運動を組織しました。

西宮では市とたびたび交渉の末、市から事業団をつ
くりなさい、仕事を出しましょうということになり、
三〇人ぐらいの人たちが事業団をつくり、市の公園な
どの清掃事業をすることになりました。事業団といっ
ても初めての経験ですから、ピンハネはしない、団を
民主的に運営するという内規をつくり、仕事を拡大
し、団員を拡大していきました。この運動が全国にひ
ろがりました。

この運動が転機を迎えるのは、各地につくられた三
〇ぐらいの事業団が集まって全国協議会がつくられた
昭和五四年頃からです。事業団運動の発展の方向が模
索され、最初の七つの原則が決められました。事業団
運動は単なる職よこせの運動ではない、労働者が出資
し、管理し、企業を民主的に運営する運動、つまり労
働者協同組合に発展させなければならぬ、そういう
方向がだんだん明らかになって、前記の七つの原則に
発展するわけです。

事業団運動とは別に争議のなかから生れた自主生産
企業、ハイテクの東芝アンベックス、靴のパラマウン
ト、タクシー等の企業が事業団と合流して「グルー
プ」をつくる動きも進んでいます。また奥さん方が主
となって各地で進めている「ワーカース・コープ」の
運動、その他の各種の草の根的協同運動（障害者、
高齢者、子育て、教育、文化……）との大きな連帯が
まちがいに進んでいくだろうと思えます。

労働者が企業の主人公になるためには、「徹底民主
主義」の道を通らなければ不可能だと思えます。協同
組合には株式会社と違って一人一票で議決する原則が
あります。株式会社は株数によって議決されますが
ら、少数の大株主が企業の支配権を持ちます。したが
って協同組合方式は株式会社、国営企業と比較しても
働く人が主人公になり易い、すぐれた企業形態であり
ます。このすぐれた企業形態を生かすか殺すかのキメ
手は民主主義にかかっているように思います。形式は
協同組合でも実体は株式会社と変らないということも
起こり得るわけです。民主主義を深めることが今の私
達の中心課題となるわけです。次回は徹底民主主義に
ついてのべます。

（中高年雇用福祉事業へ労働者協同組合 全国連合理事長）



徹底民主主義

徹底民主主義のこと

「徹底民主主義」……聞きなれない言葉だろうと思います。その答です。それは三、四年前に私がはじめて使った言葉ですから。いや、もっと正確に言うと、全日自労と事業団運動の実践がくり出し出てきた言葉です。

すこしまえに大衆運動の法則性について話しました。人間の集団運動である大衆運動にも法則性が働いていること、法則性を掴んだ指導がある時に大衆運動は大きく前進するという私の経験と考えを話しました。そして現在の数多くの大衆運動に法則性を追求する視点が確立していないという私の嘆きも述べました。

大衆運動の法則性を追求しているうちに、私は「徹底民主主義」という法則が働いていることを知りました。全日自労の松阪で活動しているとき、つぎのこと

が私の実践上の中心課題でありました。つまり、どうすれば労働者はより強く団結できるのか、どうすれば幹部主導ではなく皆が「やる気」になって、つまり下からの自発的な運動をつくれるのか、どうすれば敵の攻撃にへこたれない粘り強さを持つことができるのか、この答えを見つげるために必死でとりくみました。試行錯誤のなかから、「こういうやり方をすればうまくいくが、別のやり方をすれば必ず失敗する」——そういう、きまりのようなものが存在していることがわかりました。それが法則性なのだと思えるように

なり、その一つを「徹底民主主義」と名づけたのです。

徹底民主主義の特徴

私たちの徹底民主主義論には三つの特徴点があります。その第一は「討論する民主主義」であること、討論を何よりも重視するということです。第二は「自発的民主主義」、あるいは「やる気を引き出す民主主義」でなければならぬということです。これは現場での討論を重視し、討論↓納得↓合意↓やる気（自発性）という過程を特別重視します。

第三は、異なる意見の合意を重視することです。多数決はたしかに、民主主義の基本原理にちがいはありません。しかし、のぞましい方向は、話し合っ合意をつくりあげることです。以上の三つの特徴について、もう少し説明を加えましょう。

階級的な利害の基本的な対立がない労働組合のような人間集団でも、組合員の意見や考えはさまざまです。仔細に検討すれば十人十色です。大きく言っても三つに分かれます。提案に対して、賛成、反対、中立の三つに分かれるのが通常です。この意見のちがいをそのままにして、多数決でものことをきめても、ほんとうの団結をつくることはできません。団結を強める

ためには、「討論」を重視すること、「合意」をつくることを重くみることが必要です。

総評と世界労連時代の私の経験を若干お話しします。執行部の提案に対して、私はしばしば建設的に対案を提起しました。しかしその提案が討論もされず、少数意見として、採決でほうむり去られ、あるいは討論もされないで、空しい思いをしたことを覚えています。

これでは団結は空文だ、自分たちの組合ではこういうことは絶対すまいと心に誓ったものです。民主主義を多数決原理と単純にとらえている人からすれば、このやり方はルール違反ではないのでしょうか、たぶん。

労働組合には「民主的運営論」という原則があります。その民主的運営論から見ても、さきのやり方はやはり違反とはならないのでしょうか。そうすると労働組合がほんとうの団結を固めようとするなら、民主的運営論だけでは不十分だと私は考えています。

最近の労働組合は幹部組合で、現場の組合員のやる気に基づいて運動を組み立てていない、従って幹部請負的になり、現場の組合員と執行部との断層が大きき弱点となっていると指摘されています。何もこれは労働組合に限ったことではありません。民主的団体に共通の現象のように思います。組合員のやる気、自発性を高めるという視点で運動を考える場合、何が

ちばん大切かということです。それは討論、話し合いを何よりも重視するという姿勢ではないでしょうか。意見のちがいは、討論、話し合いで合意をめざす、またある場合には一致点だけで協同行動をめざす、こういう努力のなから一定の納得の状態をつくり出すことが可能となります。討論↓納得↓合意↓自発性↓行動が人間行動の法則であります。

討論の場合、本音の討論をすることが特に大切であります。本音の討論が完全に保障されていることがとくに重要であります。本音が言えない組織や団体は、それだけで民主的組織の脱落者であり、その組織に未来はないと断定することができます。

何度も例にあげて恐縮ですが、ソ連社会主義には、本音の討論、自発性、合意を重視する民主主義がなかったことが致命傷となったと私は見えています。これさえあれば政策上の誤りも、指導部と国民との断層もすべて克服できたのです。独断と偏見的に言いますと、マルクス主義には民主主義論が弱く、レーニンの国家と革命にあらわれているように権力至上主義的な弱点を感じられます。

私たちは、とかく民主主義を簡単に軽く考えがちですが、それが如何に重いものであるか、民主主義論を深めることが如何に大切な私たちの課題であるかを、

ソ連の事態の進行を見ながら、また私の五〇年の大衆運動の実践から、改めてかみしめているところです。私たちの徹底民主主義はそのための試験であり、問題提起でもあります。紙面の関係で、くわしく述べる余裕はありませんが、国家や社会のような階級的利害で対立する人間集団でも徹底民主主義は有効であり、強い武器であると考えます。

リーダーシップ

私は最近リーダーシップという言葉がとくに気に入っているのです。日本語に訳すと、指導性ということになるのでしょうか。実は、五〇年の大衆運動のなかで私はいちども平組合員でいたことはなく、ほとんど長のつく役職にいて、いつも指導、指導ということを考えてきました。以前はそうでもなかったのですが、最近では日本語の指導という言葉が、教えるとか、導くとか、押しつけるとかの意味合いを強くもっていて、お前にそんな資格があるのか、お前はしばしば誤ったではないか、お前は大衆から学んだことの方が多いではないか、教育というが、ほんとうは「共育」ではないか、私の内部からそういう声が聞こえてくるのです。外国語のせいか、リーダーシップにはそんな嫌味感がありません。

何故ここでリーダーシップをとりあげたかといいま

すと、二、三年前ある事業団の仲間たちに徹底民主主義の話熱く話したのです。しばらくしてその反響を聞いて驚きました。中西さんの話はよかった、「幹部は組合員に無理なこと要求してはいけないのだ、私たちは主人公なのだから」と言ってますよ。これを聞いて私は絶句したのです。自分の徹底民主主義論にはそのように受けとられる弱点があることがわかり、それから徹底民主主義の話をする時、幹部のリーダーシップなしには、それは成果をうまないのだと話すことにしています。

幹部のリーダーシップについてもいろいろの要素があるのですが、とくに私は幹部の活動方法が重要だと考えています。数多くの幹部と共に働いて、幹部の活動方法に六つのタイプがあることがわかりました。六つのなかで五つのタイプは大衆運動を弱め、場合によっては破壊する役割をしています。この五つのタイプを克服しないと、幹部はその役割を果たすことも、徹底民主主義を定着させることもできません。

幹部の六つのタイプ

一、命令型、指令型……命令、指令、それでもダメなら強迫で人を動かそう、動かせると考えているタイプ

ブです。これは権力主義者、搾取者の思想です。

二、勝負型……実はこれが一番多いタイプです。幹部がすべて勝負って、仲間に問題提起もできず、討論、やる気、合意を組織することができず、ストレスと過労、人を信頼できなくなります。

三、大衆追従型……難関をのりこえ、事態を一步前へ進めるというリーダーシップがなく、大衆の消極的意見に追従するタイプです。

四、少数精鋭型……大衆追従型とは正反対で、やる気のないものは放っておけ、やる気のある者だけで突撃しようというタイプです。これでは団結はできませんから、いつかは足をすくわれ孤立します。

五、裏工作、陰謀型……利益誘導をやったり、陰謀をめぐらしてことを進めようというタイプで最悪のタイプです。これはしばしば組織を破壊に導きます。私の経験ではこのタイプが必ずしも少なくないというのが残念ながら実体です。

六、徹底民主主義型……これが一番ほしいタイプです。討論、自発性、合意を組織し、幹部の責任を果たすタイプです。

さて、皆さんはどのタイプですか。次回は最終回となりますが、「自立と協同と愛」の人づくりについてお話することにします。

(中・高年雇用福祉事業(労働者協同組合)全国連合会理事長)



自立と協同と愛

人間学

「人間学」という学問のあることを最近知りました。一番身近にありながら、いちばんわかっていないのが人間のことだという思いが強くなったので、人間学という言葉に新鮮に感じ、この学問が重要になってくるなど考えているのです。心理学、倫理学、教育学、生物学、生理学、栄養学、体育学、医学、それに最近急成長を上げている分子生物学等は人間学の構成部分でしょうし、哲学も経済学も深いかかわりをもっていると思います。

総合科学としての人間学が確立すれば、人間研究は飛躍的に進むだろうし、その成果を人間実践や教育の

なかにとり入れることがより可能となります。大学に人間学部ができていくという話は聞きませんが、人間学はこれからの課題だと思います。

何故こういう話をしたのか、その理由を話しますと、私の人生を通じて、そして現在も人間学のようなものを熱烈に求めているからです。私が一四、五歳の頃、中学二、三年生のころ、自分は進学すべきか、いや、どんな人間をめざすべきか、人間はどんな生き方をすべきなのか、人間の値うちとあわせとは何なのか、簡単には解答が出せない難問にとりくんでモンモンとした経験があります。そのころ河上肇の『第二貧乏物語』、山本有三の『君はどう生きるか』などの本から強烈な影響をうけました。

人間らしい生き方とは、どんな生き方なのか、どんな人間をめざすべきなのか、人間学はこういう問いにも答えることができるだろうと思うのです。

自立・協同・愛

五〇年も運動をやってきて、いちばん気がかりなこととは、私たちの運動が自立と協同と愛の人づくりに成功したか、どうかということだ。率直に言って、この点で必ずしも成功したとは言えない、その反省の思いが現在も強いのです。たしかに私の近くにいる自労のおばさんたちには苦しいたたかいをへて、よそのおばさんとはひと味違う人間成長が感じられます。大衆運動の実践が人間を変え、成長させます。しかしレニンの言うように自然成長性に満足してはいけいないのだと思います。もうすこしはつきりさせますと、大衆運動のなかで要求を実現させ、組織を発展させることが最重点にはちがいないが、それだけではない、その運動が、幹部をふくめて参加者の人間成長をどれだけ達成したか、この点がひじょうに大切だと最近はおもっています。その点で自分の五〇年の運動は成功していないとも感じているのです。

さて、自立と協同と愛の人づくりについて概略の説明をしておきます。

自立とは依存的ではなく自律的な人間のことです。そういう意味では自立より自律という言葉を使うのが好ましいのかもしれませんが、「会社人間」という言葉があるように、企業に依存する人間が大量につくり出されています。これは日本の労働運動の弱さの故にそうなのか、企業の管理システムが巧妙の故なのか、あるいは両方のせいなのか、企業や組織依存の人間が大量につくり出されていることはまぎれもない事実です。依存的人間の将来が大へん不幸なことは明らかです。

他方、自立的人間にも二種類あるように思います。自己中心的で利己主義的人間ともう一つは協同的自立者です。自分さえよければという人間はよしんば能力ですぐれていても、私は最低の人間だと思っています。自分はこの人間にだけはなるまいと心に決めて努力してきました。

ほんとうの自立・自律的人間とは自立と協同を不可分のように結びつけられる人のことだと思えます。自分のことも大切に考えるが、同時にまわりの人のことを考えて行動できる人だと思えます。自立と協同の人、実はそれだけでも大へんなことですが、さらに協同と愛の心をもった人間が最高の人ではないかと思うのです。愛という言葉に辞書(広辞苑)を引いて見ま

したが、協同心と結びついたものという説明は出ていません。協同心と愛の心は同じものではないにしても、深く結びついているように思います。私が最近よく思うことの一つは、民主的な諸運動は愛の運動であることをもっと明確にすべきだし、またそれにふさわしい内容をもつべきだと考えるのです。もちろん階級闘争と矛盾するものではありません。逆に階級闘争をより豊かに、魅力的にするものだと思います。

現在の利潤原理社会が、自立と協同心と愛の人づくりや文化を産み出せないことは明らかだと思います。利潤原理社会は依存的な人間か、自分さえよければという人間を産み出すのです。そこでは、人間性の荒廃と文化の荒廃が進み、人間をおかしくしてしまうところまでできているように思います。人類の危機は環境・資源・核戦争におとらず、人間そのものを荒廃させている危機だと考えています。

文化のこと

自立と協同心と愛の人づくりは、そのための文化の発展なしには、考えることができないように思います。利潤原理は殺人、暴力、うらざり、麻薬、搾取、差別、人間不信などの文化を産み出してきたこと、このような文化が若者だけでなく、たくさんの方々の人間性

を荒廃させる上で大きな役割をしていることを痛感しています。

教育の問題も深刻です。偏差値重視などの学力第一主義で、実はこれは利潤企業の要求からきているのですが、人間らしい人間をつくる、別の表現をすれば、自立と協同心と愛の人間をつくることは二義的にされています。いや利潤原理はそういう教育はできないのです。

一流の企業（役所）に就職するためには、一流の学校へということでは、はげしい受験戦争と塾通いに青少年をまき込み、人間形成という教育のもう一つの課題が顧りみられない状況はまさに教育の荒廃、危機だと思います。こういう教育のなから、いびつな人間が大量生産されているのです。

自立の所で若干のべましたが、自立の第一要件は「自分の頭でものを考える」ことだと思います。自分の頭でものを考えているということとは、そこに働いている法則性を明らかにすることだと考えます。丸暗記式の教育ではなく、ものごとを法的に思考する訓練が、教育のもう一つの課題ではないでしょうか。

法則性をつかむ、例えば労働組合、協同組合でどんな法則性が働いているのか、その法則は実践の指針となり、実践で試されなければ意味がありません。法則

性を握むと大へん自信がでています。基本的な点で簡単に自説をかえるということもおこりません。他から不当な圧力を加えられても節操を守ることができません。

自立・協同心・愛の問題については、人づくり・文化・教育の立場からもっと深く掘る必要があると考えています。これらの諸問題に答えられる人間学の確立を熱望するゆえんでもあります。

人を見る眼

誰でも大へん苦勞することの一つに人を見る眼のことがあります。私もいろいろと失敗してきました。しかし、自立・協同心・愛という視点が明確になるにつれて、今までより、やや正確に人を見ることができるようになったのではないかと考えています。リーダーの場合、とくに能力という要素が大切であります。たとえ、能力があっても、自分さえよければという人はやはりリーダーとして、人間として不適格であると考えています。また、自分の頭でものを考えられない人もいます。こういう人は利己的人間でなかったとしても、幹部としてはやはり適格ではありません。系統性がなくたえず動搖的であります。げに、人間というものはむつかしいものだと思います。しかし難しいと言

ってなげいているだけでは、進歩がありません。人間成長の法則性が必ず存在する筈です。これからの実践のなかで、この問題にとりくみたいと考えています。

自立・協同心・愛の人間成長は労働者協同組合の七つの原則の重要な一つとして位置づけられており、各地でそのための実践が進んでいます。この実践がこの方面の理論、政策を大きく発展させるものと信じています。

さいごに自分のことをのべておかなければなりません。私は自分を反省して思うのですが相当の自己中心の人間です。毎日そういう自分と闘っています。もし私が民主的運動に参加していなかったら、鼻もちならぬ人間になっていたのではと思うことがあります。自立・協同心・愛の人間にとここまで近づけるかわかりませんが、せい一杯の努力をするつもりです。

今回で私の連載は終ることにします。五〇年近い実践の私なりの総括であります。読者の皆さんのこれからの実践に役立つことができるか、どうか、自信はありません。

締切りを守らず、編集部に迷惑をかけたことをおわびします。

(中・高年雇用福祉事業(労働者協同組合) 全国連合会理事長)